

危機対応マニュアル

埼玉県中体連ソフトテニス専門部

I 気象予報・警告等

1 注意報 気象現象等によって災害の起こる恐れがある場合に地方気象台より発表。

大雨注意報	大雨によって災害が起こると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 1時間雨量30mm以上になると予想される場合
洪水注意報	洪水によって災害が起こると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 1時間雨量30mm以上になると予想される場合
地面現象注意報	大雨・大雪等による山崩れ、地すべり等によって災害が起こると予想される場合 他の気象注意報に含めて発表する
浸水注意報	浸水によって災害が起こると予想される場合、他の気象注意報に含めて発表する
雷注意報	落雷等により災害が起こる恐れがある場合
波浪注意報	風浪、うねり等によって災害が起こると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 有義波高が1.5m～3m以上になると予想される場合

2 警報 警報とは、重大な災害の起こるおそれがある場合に発表。

暴風警報	暴風によって重大な災害が起こるおそれがあると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 平均風速が、陸上で20m/s以上、海上で20m/s以上になると予想される場合
暴風雪警報	暴風雪によって重大な災害が起こるおそれがあると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 雪を伴い、平均風速が、陸上で20m/s以上、海上で20m/s以上になると予想される場合
大雨警報	大雨によって重大な災害が起こるおそれがあると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 1時間雨量60mm以上になると予想される場合
洪水警報	洪水によって重大な災害が起こるおそれがあると予想され、具体的には次の条件に該当する場合 1時間雨量60mm以上になると予想される場合

II 大会・活動実施等の判断

【学校総合体育大会・新人兼県民総合体育大会】

収集した情報や関係機関からの注意報・警報等を考慮して、①専門委員長 ②常任委員長 ③監督 ④施設管理者で十分に協議し、活動・大会実施の判断、大会日程や活動時間の短縮、活動・大会開始の遅延などの措置を講じる。また、状況に応じて中学校体育連盟会長と協議する。場合によっては、県中体連が中止の判断を行うこともある。

1 大会基準

大会主催者埼玉県中学校体育連盟および各種目専門部は大会運営にあたり、「競技者・大会関係者および一般地域住民への安全」を最優先に配慮することを確認する。大会主催者は大会運営にあたり下記の権限を保有する。

(1) 大会当日において、台風等の悪天候により競技環境の悪化・十分な安全確保が見込めないと判断した場合には競技の内容の変更または中止を決定する権限。また、その際の中止基準は以下の基準を目安とし、現地で検討する。

中止基準(競技中止の目安)

- ① 平均風速20m以上の強風が終日続くおそれのあるとき。
- ② 強風により海上・河川の波の高さが2mを越えるとき。
- ③ 濃霧などにより、会場の視界が100mを切る状態が続くとき。
- ④ 1時間あたりの雨量が60mmを越える、または越える予報が出たとき。
- ⑤ 地面現象(地震等)・雷・波浪の各警報が出されたとき。
- ⑥ 感染症流行時、厚生労働大臣よりフェーズ5(※1)の宣言が行われたとき。
- ⑦ WGBTが31℃を越える状態が続くと予想される時。

※1 世界保健機関(WHO)が、感染が世界的に大流行する危険性や、事前対策を実施する必要性について知らせることを目的として、警戒レベルを1から6の6段階に分類している。フェーズ5は「より大きな集団感染の発生と、世界的な大流行につながる危険性がある」ことを意味する。国内で発生した場合、数字の後にBをつける。

- (2) 競技規則に違反した競技者に対して、失格・競技の中止を宣告する権限。
 (3) 競技技術の未熟さ、過度の疲労・競技中の事故等の理由で競技続行に支障があると判断した競技者またはチームに対して、競技の中止を宣告する権限。

2 大会・活動の中止以外の判断

- (1) 1の項では大会・活動の中止についての基準(目安)を示したが、周りの環境は時間とともに変化してゆくものであり、変更の告知後も情報の収集を行うことが必要となる。また、中止に至らない場合は、次のような措置が考えられる。

- ① 大会・活動の遅延(一定の時間が経過した後に予定の活動を行うこと)
 ② 延期(日を改めて予定の活動を行うこと)
 ③ 規模縮小(参加チーム・個人数の制限や競技時間の短縮など)
 ④ 日程の変更(別の日程で大会・活動をやりなおす)

- (2) 上記項目の遅延するような場合には、活動の再開を判断することが難しく、次のような準備が必要である。

- ① リアルタイムで情報が収集できるネットワーク環境があること
 ② 協議の場と協議する役員が待機できる場所の確保
 ③ 再会の告知が速やかかつ全関係者になされること

- (3) 判断結果の告知については、電話連絡やメール配信が考えられるが、判断内容が速く正確に伝わるために専門部役員間はもちろん、顧問・生徒・家庭間の連絡網の整備が望まれる。

3 会場の安全管理

【考えられる事故事例】

- ・ラインテープが浮いており、練習中に足が引っかかり転倒し捻挫する
- ・グラウンドストロークをストレート3コースで練習中、回り込んで打ったセンターコースの選手のラケットが横の選手の顔面にあたり、眼球を損傷した
- ・ジャンピングスマッシュを練習中、ボールの上に着地して転倒、捻挫をする
- ・重く、ガットのテンションの高いラケットを使用し、肘や肩を痛める

【安全チェックリスト】

施設 ・ 設備	<input type="checkbox"/> 〈クレートコート〉 ラインテープや釘が浮き上がっていないか <input type="checkbox"/> 〈オムニコート〉 砂が均等に広がっているか、砂が不足していないか <input type="checkbox"/> ネットワイヤーにささくれや破損はないか <input type="checkbox"/> 支柱に破損はないか、ハンドルは取り外したか <input type="checkbox"/> コートサーフェイスに合ったシューズを使用しているか
活 動	<input type="checkbox"/> まわりの選手と距離をとってスイングしているか <input type="checkbox"/> ストローク練習で回り込む時やサウスポー選手の時に、ラケットが横の選手にあたらないようお互い注意しているか <input type="checkbox"/> コート内のボールを拾う時は、まわりの状況を十分確認しているか <input type="checkbox"/> ボールがコートに散乱していないか <input type="checkbox"/> ウォーミングアップ・クールダウンをきちんと行っているか <input type="checkbox"/> 練習の中で適切な休息時間を設けているか
救 急 体 制	<input type="checkbox"/> 緊急時の連絡体制は整備されているか <input type="checkbox"/> 医薬品などの準備はできているか <input type="checkbox"/> RICE処置やテーピングなどの応急処置について、理解しているか <input type="checkbox"/> 当番医の確認や医療機関への連絡体制は整っているか

4 生徒・教員(競技役員)・引率者の安全確保

【地震に対する初期対応】

- ① 緊急地震速報が発表された時は、揺れが到達するまでの間に、生徒等に対して危険な場所から離れ身の安全を守るよう呼びかけるとともに、自身も身の安全を確保する。また、突然揺れに襲われた時も、可能な対応行動をとる。
- ② 室内で競技中の場合は、生徒を机の下等に潜らせ、机の脚をしっかりと持たせる。
- ③ 身を隠すところがない場合は、座布団や手近にあるカバンなどで頭を覆い、できるだけ低い姿勢をとらせるなど、場所や状況に応じた適切な行動をとらせる。
- ④ 火気使用中の場合は、身の安全を確保した上で、火災発生の防止に努める。揺れがおさまったら、ガスの元栓を閉め、電気器具等のコンセントを抜く。
- ⑤ 恐怖と不安で生徒がパニック状態になっているので、教職員は、生徒が落ち着いて行動できるよう具体的な指示をする。
- ⑥ ドアや窓、会場の入り口を開け、脱出口を1カ所以上確保する。
- ⑦ 激しい揺れは、1～2分程度で収まるので、落ち着いて行動する。

【地震の際の避難】

- ① 場内放送、ハンドマイク等で全員に避難を指示する。
- ② 火災が発生した場合、出火場所を周知し、迂回するよう指示する。
- ③ 各役員は、生徒に対して、適切な避難経路を指示したうえで先導する。
(先頭や最後尾に役員がつくように工夫する。)
- ④ 負傷者の有無を確認し、応急処置を行う。
- ⑤ 頭を覆い、上履きのまま、避難場所へ行く。
- ⑥ 煙が発生している場合は、ハンカチなどで鼻・口を覆い、避難する。
- ⑦ 海岸付近では、津波の恐れがあるため、できるだけ早く高台へ避難する。
- ⑧ 避難場所に集合後、人数確認をする。

【避難後の帰宅】

- ① 生徒を帰宅させる場合には、余震や津波を考慮するとともに、事前に通路を点検したり地域の情報を収集したりするなどした上で、適切な時期に行う。また、帰宅時の注意事項にいて十分な指導を行い、安全確保の徹底を図る。なお、通路の安全が確認できるまで、会場に生徒を留まらせる。
- ② 帰宅時刻を変更する場合は、顧問を通じて速やかに保護者と連絡をとる。また、通路の状況等により、必要と判断した場合は、保護者への引き渡しを行う。
- ③ 保護者が避難してきた場合は、原則として保護者への引き渡しを行う。

【集中豪雨の初期対応】

- ① テレビ、ラジオ、気象関係のホームページ等で、気象情報や河川情報、避難勧告発令を確認する。
- ② 公共交通機関の状況をインターネット、電話、駅に出向くなどして確認する。
- ③ 会場周辺の冠水状況を常時監視する。
- ④ 建物内へ浸水の可能性がある場合は、速やかに生徒を高所、高台に避難させる。
- ⑤ 可能であれば、電気機器、薬品等の危険物などを安全な場所に移動する。
- ⑥ 風雨の状況により、生徒を会場に留ませたり、保護者への引き渡しを行う。
- ⑦ 移動前で生徒が家庭にいる時は、大会中止、自宅待機の措置を講ずる。

【集中豪雨の際の避難】

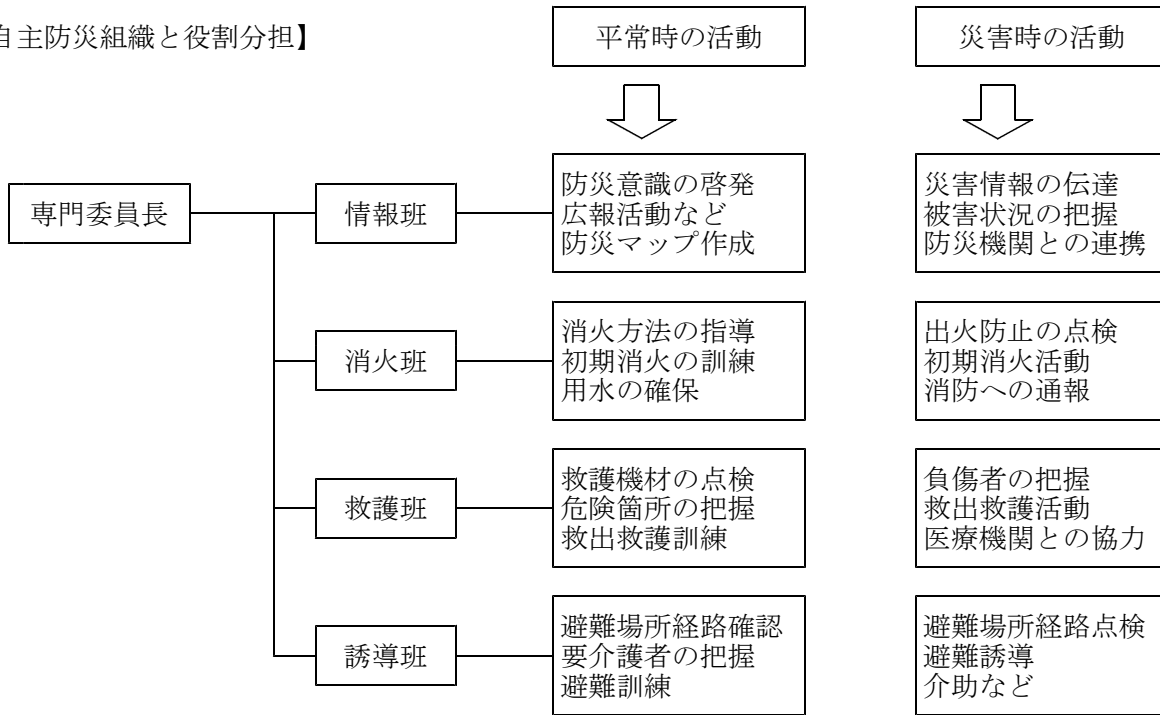
- ① 各役員は生徒に対して、適切な避難経路を指示したうえで先導する。
(先頭や最後尾に役員がつくなど工夫する。)
- ② できるだけ早く高所、高台へ避難する。
- ③ 会場外へ避難する際は、排水溝や側溝などが冠水で分からない場合があるので、気をつける。
- ④ 風が強い場合は飛来物にも注意する。
- ⑤ 避難場所に集合後、人数確認をする。

【避難後の帰宅】

- ① 生徒を帰宅させる場合には、風雨の状況を把握するとともに、事前に通路を点検したり、地域の情報を収集したりするなどした上で、適切な時期に行う。また、帰宅時の注意事項について十分な指導を行い、安全確保の徹底を図る。なお、通路の安全が確認できるまで、会場に生徒を留まらせる。
- ② 帰宅時刻を変更する場合は、あらかじめ定めた方法で速やかに保護者と連絡をとる。また、通学路の状況等により、必要と判断した場合には、保護者への引き渡しを行う。

Ⅲ 自主防災組織

【自主防災組織と役割分担】



Ⅳ 自然環境に対する留意点（熱中症の予防について）

熱中症とは、暑い環境で発生する障害の総称である。熱中症の発生には、気温・湿度・風速・輻射熱（直射日光など）が関係しているため、同じ気温でも湿度が高いと危険性が高くなり、また、運動強度が強いほど熱の発生も多くなり、熱中症の危険性も高まる。これまで日中の最高気温が30℃を超える日を真夏日と称していたが、最近では35℃以上の日を猛暑日と呼ぶようになり、夏季は熱帯夜が続くことも多くなった。熱中症は予防できるものであるため、指導者は生徒の心身の体調や疲労の度合いに十分な注意が必要である。

1 【熱中症の病型と症状】

スポーツで問題となるのは、主に熱疲労と熱射病である。

熱失神	皮膚血管の拡張によって血圧が低下し、脳血流が減少して起こるもので、めまい、失神などがみられる。 顔面蒼白となって、脈は速く、弱くなる。
熱疲労	脱水による症状で、脱力感、倦怠感、めまい、頭痛、吐き気などがみられる。
熱けいれん	大量に汗をかいたときに水だけしか補給しなかったため、血液の塩分濃度が低下して、足、腕、腹部の筋肉に痛みを伴ったけいれんが起こる。
熱射病	体温の上昇によって中枢機能に異常を来たした状態。意識障害（反応が鈍い、言動がおかしい、意識がない）が起こり、死亡率が高い。

暑い場所で無理に運動しても効果は上がることはなく、環境条件に応じた運動・休憩・水分補給の計画が必要である。熱中症予防に関しては、いずれの運動やスポーツにおいても、気候、休憩と水分補給、運動量と時間及び衣服による体温調節や熱中症が疑われた時の処置方法など、既に多くの安全対策が講じられている。夏季の運動部活動においては、運動の特性や生徒の健康管理を踏まえた熱中症対策を重点的に行うことが大切である。

【熱中症予防のための指標・WBGT（湿球黒球温度）】

WBGT（湿球黒球温度）とは、人体の熱収支に影響の大きい気温、湿度、輻射熱の3つを取り入れた指標で、乾球温度、湿球温度、黒球温度の値を使って計算します。

GBT (°C)	湿球温 (°C)	乾球温 (°C)	運動は 原則中止	WBGT31℃以上では、皮膚温度より気温の方が高くなり、身体から熱を逃すことができない。
31	27	35
			厳重警戒	熱中症の危険が高いため、激しい運動や持久走は避ける。体力の低い者、暑さになれていない者は運動中止。運動する場合は積極的に休息をとる。
28	24	31
			警 戒	熱中症の危険が増すため、積極的に休息をとり、水分を補給する。激しい運動では30分おきに休息
25	21	28
			注 意	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。熱中症の兆候に注意しながら、運動の合間には積極的に水分を補給する
21	18	24
			ほぼ安全	通常は熱中症の危険は少ないが、水分の補給は必要。マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注意をする

※ WBGT（湿球黒球温度）の算出方法

屋外：WBGT = 0.7×湿球温度 + 0.2×黒球温度 + 0.1×乾球温度

屋内：WBGT = 0.7×湿球温度 + 0.3×黒球温度

※ 環境条件の評価はWBGTが望ましい。

※ 湿球温度は気温が高いと過小評価される場合もあり、湿球温度を用いる場合は乾球温度も参考にする。

※ 乾球温度を用いる場合は、湿度に注意。湿度が高ければ、1ランクきびしい環境条件への注意が必要。

V 大会・活動等の再開

1 大会再開の判断

警報が解除または注意報に切り替わったり、安全が確認された場合、専門委員長が再開の判断をする。また、状況に応じて中学校体育連盟会長と相談する。

2 大会再開の方法

(マッチの中止と再開)

- 第44条 天候その他の事情でマッチが一旦中止又は延期になった場合は、その後のポイントから引き続き再開することを原則とする。
- 2 コートを変更し、又は後日再開する場合のサイドは、そのマッチでサイドを選択したペアが選ぶものとする。
ただし、同日同一コートで再開の場合は中止前のままとする。

(規則上の疑義)

- 第45条 マッチにおいてこの競技規則に定めのない事項が発生した場合は、アンパイヤーはレフェリーと協議して決めるものとする。

(公財)ソフトテニス連盟 ハンドブック「競技規則」より